

いろはの呪文がとけるとき

神戸女学院大学非常勤講師 東野泰子 ひがしの やすこ

新しい学習指導要領に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、古典の取扱いが具体的に示されました。また、小学校でも古典教材が導入されることもあり、中学校での指導のあり方にも、いつその工夫が必要になってきます。東野先生は、さまざまな教室で古典を教えていらっしゃるしやいます。その経験から、生徒を古典の授業に引き込むための導入の工夫や、古典を学ぶ魅力、教える楽しさについて、六回にわたって連載していただきます。

「どろけい」と「いろはうた」

先日、高校生に「いろはうた」を書いてもらった。正しく書ける生徒はクラスに一、二名で、大半は「いろはにはへとちりぬ」あたりで手が止まってしまふ。「いろはにはへと」に続きなんてあるの？という生徒すらいる。聞けば、「いろはは「どろけい」でしか使ったことがなく、「ちりぬ」までしか知らないらしい。複数のクラスで試みたけれど、どのクラスでも「どろけい」という声がある。

「どろけい（地域によっては、けいどろ）」とは、泥棒チームと警察チームに分かれて行く大人数の鬼ごっこで、私の住む神戸市をはじめ、チーム分けに「いろは」を使う地域があるようだ。「いろは」の使い方は、一人ずつ左右に振り分けていくときに、「い、ろ、は」と唱えるだけであったり、「いろはにはへと」までが泥棒、「ちりぬるをわか」までが探偵、または「ぬ」に当たった子が「ぬすつ」と「た」に当たった子が「探偵」と、地域によってさまざまである。「どろけい」は、子どもがみな「いろは」を唱えることができた時代からあつた遊びなのだろう。私の小学校時代（昭和四十年代）は、ひらがなを五十音順に習った。しかし、学校で習わずとも、当時のたいていの子どもは「いろは」を唱えることができた。テレビドラマ『銭形平次』の主題歌に「恋のいろはは見当つかぬ」という歌詞があつた記憶もあり、現在の子どもよりは「いろは」が身近にあつた。

また、最近「ぬすつ」という言葉も使われなくなり、子どもたちに馴染みがなくなつてしまつた。「ぬすつ」は今「どろぼう」である。「いろはにはへとちりぬーぬすつ」と「るをわかよたーたんでい」という使い方をするのでなければ、わざわざ「いろは」を使う意味もなからうと思うが、不思議なことに、最近の子どもたちも「どろけい」では意味もわからずに「いろは」を唱えている。「どろけい」と「いろは」の結びつきは、子ども遊びのなかでの伝承、ということなのだろう。

身近な「いろは」から授業へ

そのようなわけで、先の高校生たちにとって、「いろは」は、遊びのときのなにかわからない呪文のようなものであつて、学校の古典の時間に習うなどとは思ひもよらなかつたらしい。平安時代からあつて、当時のかな文字をすべて一回ずつ使つて、意味のある歌になつていくんですよ、というと、本当になかな文字すべてが含まれているのかと、「おまえはア行を探せ」「おれはカ行な」などと手分けして五十音順に確認している。「あ」「ゑ」がワ行で、ア行の「い」「え」とは違う音だということもはじめて納得したようです、ずいぶん感心している。「どろけい」のほかに「いろは」が使われているものはないかと尋ねると、ドレミファソラシドがハニホヘトイロハであることをみな思い出し、小学生に人気のテレビアニメ『忍たま乱太郎』の主人公・乱太郎は、忍術学園の一年「は組」

だが、一年「い組」のほうが優等生なのだ、ふだんの古典の時間は居眠りしがちな子までも、いつになく楽しげに教えてくれたのだった。

中学校国語の一年生教材に「いろは歌」が掲載されているが、こうした話を授業の導入とするのも古典への誘いとして有効ではなからうか。

「いろははどろけい」という彼らの認識に、私は新鮮な驚きを感じたけれども、この「いろは」の場合のように、遊びの中に、暮らしの中に、それと意識せず存在し続けているものこそ、古典らしい古典であるかもしれない。

古典に由来する「？」

役に立つも立たぬもなく、当たり前のようにそこにあつて日々を彩っている、古典に由来するそういうものを私たちの生活は確かに持っている。桜が咲けば花見に行かずにはいられず、

毎年のように桜にちなんだ歌がヒットチャートにあらわれる。ウグイスの鳴き声は、たとえそれがあまり上手な鳴きかたではなくても、「ほう、ほけきょう（法華経）」と聞こえてしまふ。七月七日には、牽牛織女のために空模様を気かけ、子どもたちはたどたどしい字で短冊に願い事を書く。モモタロスやウラタロスに憑依される仮面ライダー電王は、グロテスクな風貌ではあるけれど、なんだか可愛らしく見えてくる。こうした生活を私たちは楽しんでいて、それだけでも古典に由来する文化を享受しているといえるだろう。けれども、なんだかわからない「どろけい」の呪文が「いろはうた」だと気づいたとき、そこには新鮮な驚きと知るよるこびがある。桜を惜しむ気持ちや桃太郎へのなつかしさを、自分のものとして問い直したり、身近にありながらよく知らなかった言葉の意味を確かめたりすることから、数百年前の世界に少し近づいてみるのも、古典への扉を開くひとつの鍵である。

東野泰子

大阪府生まれ。論文に「奥義抄」から「僻素抄」へ「そが菊」注にみる院政期歌学の様相（『国語国文』など）、共著書に「八雲御抄の研究 正義部作法部」（片桐洋一編和泉書院）、「要曲索引」（伊藤正義監修・和泉書院）などがある。